

加賀藩と室鳩巢 葛巻昌興との交流 その2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-04 キーワード: 作成者: 畑中, 榮 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00063655

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



加賀藩と室鳩巢

葛巻昌興との交流

その2

畑中 榮

はじめに

前号では、昌興が綱紀に諫書を奉り、そのまま謹慎して七尾の津向村で没したこと、その昌興に対する鳩巢の評価や追悼等についてまとめた。今回はそれを受けて、その昌興と鳩巢が出会い、詩作や儒学の学習を通して——主に鳩巢が昌興に教授し訓導したのであるが——醸成していった儒教精神を見て行きたい。それはとりもなおさず、武士としての節義や誇りをストイックなまでに貫いた、一人の武士の生き様でもある。

1 鳩巢と昌興

鳩巢と昌興が交流し始めるのは貞享元年、鳩巢二十七歳、昌興二十九歳頃からで、それまでのほぼ十年間は、殆ど接点がない。従って前半は各々を別々に見てゆくことになる。

昌興が綱紀に近侍するようになるのは、延宝元年（一六七三）

十八歳で新知二百五十石を賜ったことに始まる。しかし実際にはその二年前の寛文十一年頃に召し出されたらしい（注1）。そしてその年の秋能登に旅行して、和歌による「能登紀行」を書いている。（注2）

一方鳩巢も同じく寛文十一年、十四歳で綱紀の命によりその場で詩を賦し、同席していた木下順庵（以下順庵と略称）をして、「辭義観るべし。感嘆の餘り、ために次韻し、以て前程を祝す」として、七絶を贈らしている（注3）。

五岳英霊鍾少年 一篇珠玉踵前賢
聰明自與世人異 未必降才無二天

「訓読」五岳の英霊少年に鍾まり。一篇の珠玉前賢を踵ぐ。聰明は自ら世人と異なる。未必必ずしも才を降すに二天無きにあらずや。

年・賢・天（下平一先）

「五岳の英霊」は、国を鎮め人々に生死福德等を受ける五岳の神霊で、その神霊に守られると延命福寿が得られるという。鳩巢には、その神霊から授けられた才能が溢れており、先賢の明を継いでひときわ抜き出たものがある。だから、この少年の聡明な才能を磨く

のに、二天の恩人がないはずがあるうかと、暗に綱紀に召し抱えることを促している。「二天」とは人間が受ける恩で、天恩以外のもう一人の人、つまり綱紀をいう。

これが推挙になったのか、翌十二年二月十八日、十五歳で小坊主に召し出され、二十人扶持を給されて順庵の京の雑塾でその才を磨くよう命じられた^{〔注4〕}。そしてその年の秋京へ足を進めた。

京ではみだりに外出しないようにしていたが、閑暇のある日、塾から比較的近い清水寺に出かけ、「遊清水寺」の五律を賦した。その序にいう(取意)。自分は幼時より京には古蹟や名勝が多いと聞いていたが、「東鄙」に生まれたので出かける機会もなかった。今回幸いにも師に従って京に住むことになったが、学業に励まねばならぬので外出は極力控えていた。しかし清水寺は雑塾から近いこともあり、「夙志」を果たすことができた、と。

確かに鳩巢は京では傍目もふらず勉学にいそしんだらしい。高弟の一人である青地齊賢が、後年鳩巢から聞いた話として、十八歳の二月頃北野廟に一夜徹夜で参籠し、神助を得て学問を成就させたいと願ったことや^{〔注5〕}、延宝九年(一六八一)にも北野廟に十一ヶ條の誓文を奉り、学問成就を祈願したことも見られる^{〔注6〕}。

一 賓客、或は疾病及び避け難きの事を除きて、一日も懈怠あるべからず。

一 毎朝、案に對ひて先づ衣帯を整へ、乃ち一坐了り、事故有るに非ざれば、妄に動くべからず。

一 案に對ふ間、情念將に生ぜんとせば、正念を呼び起し痛くこれを懲らすべし。暫時も忽にすべからず。

よ、と自警したもの。十八歳となり一サイクルを経験し、ほぼ要領を得て油断しがちである己への戒めである。この年の二月頃、北野廟に徹夜の願をかけかけたことは、前述もした。

2 延宝五年から八年まで

かくして再びサイクルが始まり、延宝五年(一六七七)九月京から江戸へ向かったが、その時の道中記ともいえる作がある^{〔注7〕}。

相坂関 鳩巢

驛路遙連林藪間 征人走馬出東関

自此行行知日遠 回頭猶望帝郷山

〔訓読〕驛路遙かに連なる 林藪の間 征人 馬を走らせて東関を出づ。此自り行き行きて日の遠きを知る。頭を回らせて猶ほ望む帝郷の山。

馬を走らせて逢坂関まで来ると、いよいよ遠い関東への道程が待っている。ふと心残りの雑塾を振り向くと、都を取り囲む山々が望見されることだと、「征人」と意気込みつつ、どこか感傷も漂わせる。なおこの年の十一月、妹の寒が常陸の小池友輔に嫁した^{〔注8〕}。

一方この年二十二歳になった昌興は、禄百五十石を加えて四百石となり、日記をつけ始めた。この日記は、元禄六年七尾の津向村に謹慎する三月九日まで、一日も休むことなく続けられる。次はその日記の書き出しである。なお文中の()は注記である。

公御昼成七ツ半時分、五ツ過御長袴被爲成御着用。其儀終て大服献之(菊池武知役之)、次御菜(那古屋廣政役之)、次蓬菜(葛

これはその誓文の一部であるが、その姿勢の一端が伺えよう。この姿勢は、この頃の作と思われる「蘇武抵雪」にも見られる。長年、匈奴の虐待に苦しみながら、漢への忠節を曲げない蘇武を「壮節肯へて辭せんや 客爲るの怨。清忠自ら抱く 國に報ゆるの心」と賦す。これもそのまま鳩巢の志で、故国の恩に一命をかけて報いようとする「清忠」もまた、鳩巢の志である。

前年雑塾に上っていた鳩巢は延宝元年九月に江戸の本郷邸へ出向いた。ここで綱紀に近侍してほぼ七ヶ月を過ごし、翌二年夏ころ綱紀に従って金沢に戻りほぼ四ヶ月在藩した。こうして京・江戸・金沢の三点を、二年間を一サイクルとして往還する仕官生活に入り、延宝三年(一六七五)、十八歳の正月は京の雑塾で迎えた。

乙卯元日 鳩巢

三朝和氣應 千里曙光新 客舍誰相訪 殊方人自親

聊斟椒柏酒 獨對柳梅春 更恨東風至 空令歲月頻

〔訓読〕三朝に和氣應じ。千里 曙光新なり。客舍 誰か相ひ訪はん。殊方 人自ら親しむ。聊か椒柏の酒を斟み。独り柳梅の春に對す。更に恨む 東風至りて。空しく歲月を頻なら令むるを。

新・親・春・頻(上平十一真)

「三朝」は正月元旦、「和氣」は長閑で穏やかな正月らしい気候、「殊方」は故郷や金沢とは異なる土地。また「歲月頻」は、春になるとやがて勉学を切り上げて江戸に赴かねばならないこと。見知らぬ土地で見知らぬ人達との共同生活であるが、交流する内に自ずから親しみも湧く。喜びの春を迎え、形ばかりのお祝いの椒柏酒で元日を祝うが、それに甘えて空しく時間だけを過ごすことのないようにせ

巻高俊役之、各令著長袴勤之、御菜相濟蓬菜を引、次大服、追て御雑煮、フクサ、次に御膳、其品言別儀、依而略之。多賀直房、葛巻俊資、半袴にて勤之。

「昼成」は昼の間にお出ましになるの意だろうか。綱紀は午前五時頃に昼の間に出てきて、そこで先ず正月の大福茶(大服)を飲んだ。大福茶は、田作り・数の子・梅干を膳に載せ、濃い茶を点でて勧められた。「蓬菜」は三方に盛った祝儀飾りで、のし鮑・昆布・伊勢海老・勝栗・串柿・橙などの縁起物であった^{〔注9〕}。日記にはそれらを綱紀に運ぶ奥小將の姓名を記し、その時の正式な服装までもが几帳面に記し止められている。その後藩士の年頭の御禮に到るまでの次第順序・姓名等が整然と記され、一途に近侍として忠勤に励む昌興を見るようである。

昌興の日記は、近侍として見聞した事柄や仕事の記録が主であった。城下の様子や城内の有様を伝えない。次は翌延宝六年金沢に戻っていた鳩巢の作によって、除夜から新年にかけての城下をうかがってみたい。

除夕二首 其一 鳩巢

四時来往客魂驚 椒酒頌花迎夏正

城上高林凝眼色 空中微雨人鐘聲

一年欲盡疎燈夜 千里不歸遊子情

向曉聞人闐噓 方欣天意動新晴

〔訓読〕四時の来往は客魂を驚かす。椒酒頌花して夏正を迎ふ。城上の高林は眼色を凝らし。空中の微雨は鐘聲に入る。一年盡きんと欲疎燈の夜。千里歸らず 遊子の情、曉に向ひて聞人に闐噓す。

方に欣ぶべし 天意の新晴を動かすを。

「驚・正・聲・情・晴」下平八庚
四季にわたる来往は旅人の心を驚かせ、もう明日はお屠蘇と正月の花飾りで賑やかに迎える新年だ。晦日の今日は、城を取り囲む林が夜を漆黒に沈め、氷雨の中に除夜の鐘の音が吸い込まれてゆく。弱々しい燈火が消えそうな部屋で今年も過ぎ、私の心は千里も遠い江戸へと馳せてゆく。やがて年が明け朝になると村の小門に人が満ち溢れ。天が新しい年を齎したことを喜び合うのだ、と。「閭閻闐噓」は人や車が充ち溢れていること。大晦日から新年にかけての城中は、街路を埋め尽す飾り花や人ごみであふれていた。

元日三首 其二 鳩巢

豊鼓鑿鑿聲滿堂 回頭遠近望蒼茫

白山曙色動晴雪 碧海春光連大荒

雨散閭閻千樹出 霞含城郭二川長

侯門復視新年會 共沐恩波鴻雁行

「訓読」豊鼓鑿鑿 聲堂に滿つ。頭を回らせば遠近望み蒼茫たり。白山の曙色晴雪を動かし。碧海の春光大荒に連なる。雨閭閻に散じて千樹出で。霞城郭を含みて二川長し。侯門に復た視る新年の會、共に沐す恩波鴻雁の行。

「堂・茫・荒・長・行」下平七陽

新年の太鼓が鑿鑿と城中に満ち、見渡せば加賀平野が茫漠と目を奪う。年暮れに降った雪が霽れて白山が初日に輝き、仙人の棲む青海原から昇る曙光がこの原野に降り注ぐ。雨が上って街樹の列が姿

を現し、城下を覆っていた霧が霽れて犀川や浅野川の滔々たる流れが一望される。今日は侯門大家の元旦拝礼の日だ。登城して君主から恩波を受ける藩士が、雁行成して城門に列を造っている、と。そしてこの城下の賑わいの中、一人淋しく正月を迎える己にと目を向けて、「其三」が詠われる。年が改まっても閑散たる我が身、花柳と華やぐ城下、晦日に降った純白の初雪は城の上にと積った。江戸の親に新年の消息を出したが、雁は空に留まったままでまだ江戸には届かず、閨所は閑散として物寂しいだろう、出かけた息子がまだ帰ってこないの。親もいない一人の家だが屠蘇の椒柏酒を準備した。一体何時になったら、五彩の子供服を着て親を喜ばせる日が来るのだろうか、老萊子がそうしたように、と。

かくして金沢で正月を過ごして三月、再び雉塾に旅立つ。次はその時の道中詩の一首。

自賀赴京道中作七首 鳩巢

小松城郭在 隱映白雲阿 要害山河壯 經綸籌策多

英雄事已矣 悵望意如何 舊俗醉恩德 百年猶詠歌

「訓読」小松に城郭在り。隱映す 白雲の阿 要害山河壯に。經綸籌策多し。英雄の事已矣。悵望の意如何。舊俗は恩德に酔ひ。百年猶ほ詠歌す。

「経綸籌策」は國を治めるはかりこと。「英雄事」は、かつて木場

湯の北辺、浅井暇で繰り広げられた戦闘。慶長五年（一六〇〇）八月九日、関ヶ原の合戦の前哨戦として金沢城主前田利長と小松城主丹羽長重の戦闘がこの地であった。大聖寺城を攻略した利長が会津に赴くため軍を返し、木場湯近辺の沼地の驫にさしかかった時、小

3 天和元年から三年まで

前年五月に四代將軍家綱が没し、七月に綱吉が五代將軍となった。綱吉三十四歳で綱紀は四歳上の三十八歳である。新將軍となった元旦を鳩巢は、「昨夜秦城に北斗を廻らし。三朝の靄霧として氤氳。夏正朔を領つ 舊風俗。漢室壇に登る新將軍」と詠った。將軍が代わり時勢も一転して、真新しい新年の気が世に充ち満ちている。こうして新しい治世を施すべき夏正（曆）が世に頒たれて、新將軍が諸侯にまみえるのだ、と。一方でそのような晴れやかな江戸から遠く離れた京にいる鳩巢は、新しい御代に一人取り残されたような寂寥を抱いていた。

元日十首 其六 鳩巢

憶昨迎春趨北藩 金城茲日沐君恩

洞門曉啓青山府 言路新通白獸樽

重鎮得人四疆治 腐儒報國寸心存

今朝舉目殊風景 獨向江邊賦采蘩

「訓読」憶ふ 昨 春を迎へて北藩に趨るを。金城に茲の日 君恩に沐す。洞門曉に啓く 青山の府。言路新たに通す 白獸の樽。重鎮人を得て四疆治まる。腐儒 國に報ずるの寸心存す。今朝目を舉ぐれば風景を殊にす。獨り江邊に向かひて采蘩を賦す。

藩・恩・樽・存・蘩（下平十三元）

「春を迎へて北藩に趨り、金城に茲の日君恩に沐す」ことになったのは、ほぼ九年前である。三都のトライアングルも四周を終えた。將軍も年も改まったが、自分だけはいつまでも師について学ぶしか

松城兵の急襲を受け、身動きも取れない沼地に苦戦を強いられて九人の將兵の戦死者を出した。これを救ったのは殿軍の長連龍で、この辛勝が前田家を加越登三国を領有せしめ、「舊俗は恩德に酔ひ。百年猶ほ詠歌す」という栄華を得たのだった。

年が改まり、延宝八年は江戸で正月を迎え、帰藩の途についたのは九月十日で、二十二日に金沢に着いた。金沢では席を暖める間もなく、十一月頃に京に向けて発つている。「晚發賀陽二首」はこの時の作で、その中に「吾が家 素賤貧なれば。碌仕して風塵に落つ。抱閨の志に孤負して。誤ちて遊宦の身と爲る。腐儒 主に補する無く。久しく客となるも 動もすれば親に違ふ。」とある。自分は門番として世の名誉から逃れ、志を高く持って住もうと思っていた。だけどその志にも背いて加賀の国で役人となったが、無役な儒者のこととて主を補佐することもできず、さりとて親の期待にも背いて一生を終えるのであるうか、と。鳩巢の理想は、儒学によって礼節と徳操を重んずる世を導くことにあった。しかしその道は限りなく遠かったのである。

なお延宝五年には、陽広公前田光高が士人を戒めた訓戒と和歌を編した『陽廣公偉訓』の序文を草し、同八年には『本朝群籍撰考』（撰者等未詳）の序文等を草している。その中でも鳩巢は、「文武一道は偏廢すべからず」、「学文」をもって徳を修め身を修むべきことを力説する（注10）。

ない「腐儒」のままだと。元日の朝会では君主に直言を献じて、白虎の形の酒樽の蓋を開けて飲んでみたい。身を捨てて直言する有能な臣がいて、始めて四方がうまく治まる。「腐儒」たる自分にも國に報いようとする寸心があるが、その思いを届けるには京は遠過ぎる。だからここで、采蔡・藻の賦文を弄して、己の信を江辺の主に示すのだ、と。

また「其八」詩では、「かつて江戸にある時生活に窮しながら親を養い、城門の門番位で一生を終えるのが自分の天分だと思っていた。それが天下の大藩の召しを受け、儒臣として藩主に近侍する榮を得た。かくあるからには時間を惜しみ、君主に信を尽くして功名を上げよう」とも詠う。順庵門で学業に励んで十年近い。身に付けた学業にも自信がっていた。この学問をもって一日も早く世に役立ちたいとの思いは、日に日に強くなっていたのである。

武士の世にあつて、学問をもって國に仕えるとは、創業のためではなく守成のためである。五常五倫の思想と価値観を世に行き渡らせることによって、始めて武家が己の存在を樹立しすることが出来、その自負を糧として世を治めてゆくことができる。しかしそのためには、鳩果が苦しんできたように、絶えざる内省と自己啓発による自己改革を経なければならなかった。世が治まり平和となれば、自ずと緊張は弛み、武士としてのアイデンティティなどは、一朝の内霧散するからである。

其九 鳩果

自從結髮事詩書 儒業尋常與世疎
宦跡由来縁翰墨 客居况復脫簪裾

百年補過苦無足 寸禄奉親欣有餘
所願弃捐名利計 一生不負此心初
「訓読」結髮して詩書を事とせし自從。儒業は尋常世と與に疎し。宦跡由来。翰墨に縁る。客居。況や復た簪裾を脱す。百年過を補すも足ること無きに苦しむ。寸禄。親に奉じて餘り有るを欣ぶ。願ふ所は弃捐す名利の計。一生負かじ此の心の初。

書・疎・裾・餘・初（上平六魚）

「結髮」は元服。ここでは、鳩果が加賀藩に召し抱えられた十五歳の頃をいう。召し出されて儒業を事とすることになって、世間から一線を画するようになった。かくして簪裾を身にする官吏の生活とは遠くなった。学問に身を捧げて給される禄は、親に捧げて生活の支えとしても余りある。にもかかわらず自分の学業は、社稷・國の政の守りとなるにはまだまだ不十分で、百年かけてその過少を補つても足りないほどである。名利を求めて立身に奔つても、理想から遠ざかるばかり。だから一生、学問に身を捧げる決心を枉げまい、と。鳩果は直接の言及は避けているが、えてして安寧と逸樂に流れてゆく当時の時代相を、「名利の計を弃捐」するの一語に込めている。例えば元禄四年に刊された『明君家訓』には、当代の武士の風俗を、自負心や誇りを見失い、見栄と体裁ばかりを取り繕う木偶人形のごとき存在だと指弾する。

当代、士の風俗、質朴素素の気味すくなく、外見をかざり身をゆたかに持たし候。我同列又は下輩のものに對し候ては、一入高位にとりつくるひ、偏にかざりたる木人形のごとく見へ候由及し承候。

またいう。

当代、士の寄会を聞及候に、おほくは賓主ともに礼儀ただしからず、わけもなき事共口にまかせ、声高にわらひののしり、又は人の嗜好色のはなし、或酔狂をし、或小歌三味線座上とりはやすやからも有レ之由、是等は一として士の作法にて無レ之候。偏に下臈の寄合にて候。

鳩果は、このような時流に強い危機感を隠さない。そして自分もまた、そのような時流に溺れてゆくのを律しきる自信はなかった。自警の誓文を普廟に奉つたのは、前述もしたようにこの年の二月である。その誓文にいう（原漢文）。

順祥、幼き時より儒をもつて業となすも、竊にも自量せず、義を立て道を行なひ、学ぶ所に負かざらんとす。しかして氣質昏弱にして、自ら勝ふ能はず。因循苟且、以て今に至る。然るに自ら区々の志を料るに、終に已むべからず。夫れ仁をなすこと己により、他に求むべからず。然れども人に畏れられ信じられ、而して敢へて自欺せざらしむるは、神の聡明正直の者に非ざれば、其れ誰れか之を能くせん。（中略）願はくは、庇麻を垂れ、弱食を監護し、能く自ら成立して以て素志を終え使めよ。

自分は今まで儒業を事としてひたすら学問に励んできた。しかし自分の性質はぐずぐずしてその場しのぎで、このままではとてもやり遂げることは出来ない。加えて仁の理想を追求するには、絶えざる内省と自己啓発、かつ己の良心に恥じない言行が大切である。それには自分だけの力では無理なので、聡明で公正な神の力に依るしかない、と。時代は実直で質朴な世から、豊かだがその分外見ばかりを

気にして節義を忘れた軟弱な世へと変貌しつつあった。鳩果の抱いていた杞憂が、決して一人だけのものでなかったことは、前号で見た昌興の行動で明らかである。

次いで天和二年（一六八二）七月、師の順庵が將軍綱吉に抜擢されて侍講となった。順庵が京の雉塾から去ってしまうと、そこはガランとして空虚だった。九月、その雉塾での作にいう。

對月四首 鳩果

衡門常閑寂 月色轉深沈 坐與鴻同起 愁將蟲共吟
風霜酬國志 日夜戀親心 寄語故鄉友 知吾客慮侵
「訓読」衡門常に閑寂。月色轉た深沈。坐して鴻と共に起き。愁へて蟲と共に吟ず。風霜國に酬いんの志。日夜親を戀ふる心あり。語を寄す。故郷の友。知るや。吾が客慮の侵さるるを。

沈・吟・心・侵（下平十二侵）

「衡門」は、二本の柱に横木をあてただけの粗末な門。世に隠れ住むガランとして何もない家に、晩秋の氷るような月がさし込んでくる。朝は鳥と共に起き夜は寂しく虫と共に詠う。自分には、どんな苦難にあつても國に報いんとする志があれば、一方で夜も昼も親を恋う心もある。故郷の友よ、こんな月の美しい夜には、いろんな念が私の心をかき乱すことを、君達は知っているか、と。やはり親とも慕う師のいない京は寂しかった。心には報國の志は変わらずあつたが、それでも虚しい心は隠せなかった。四首目にもいう、「積夢思歸の客」「行装は秋の盡に在り。馬を駆つて関東に向はん」と。関東には親のみならず、師順庵もいる。

ところがこの年の十二月二十八日、江戸は大火に見舞われ本郷の

藩邸も焼亡してしまい、天和三年の春はこうして始まった。「日記」に鳩巢の名前が出てくるのは、一月十八日条である。この年の江戸参勤に御供して江戸に住屯する藩士を召し出して申し渡す中に、小瀬助信と鳩巢の名もある。この頃には鳩巢は金沢に来ていたのだろうか。それとも京から向かわせたのだろうか、詳細は未詳である。順庵が幕府に召し出されたので、鳩巢が儒臣の一端を担われることになったのである。参勤は、前年の大火のこともあって、当初五ヶ月頃の予定だったが、このほか再建が捗ったのだろうか、ほぼ例年通り四月二日の発となった。江戸着は十二日である。

本来ならば、九月に江戸に向くはずの鳩巢がもう四月に召し出されたのは、京での学問修行が終息しつづつあったことを示す。そしてこの年十一月二十四日、父玄樸が江戸の自宅で病没した。六十八歳であった。鳩巢の筆になる「碑陰記」にいう。

先君、幼にして穎異を見はし、長じて剛直をもつて世に遇はず。備より撰に來り、遂に武に從りて江都に家すること三十年、醫に隠れて仕へず。元和丙辰某月某日、備の郷邑に生れ、天和癸亥十一月二十四日末の時、疾を以て卒す（原漢文）。

淡々と感情を抑えた記である。父は、他に抽んでる才能と剛直な性のため世間とそりがあわず、仕官せず町医として一生を終えた。仕官して凡人に膝を屈するよりも、たとえ町医であっても医としてのプライドを持っていたからである。世俗に汚れるよりも市中に抱関の士として隠れたいと望む一面は、これまでも見たように鳩巢にもあった。なおこの年十月六日、木下順庵の次息寅亮を京から召し出し、十二月二十二日順庵に代えて召し抱えた。

ある。若くして両親を失い、零落困苦を極めていたが、学を石川火山等に受けて成り、寛文五年綱紀に聘されて三百石を拝して儒員となり、順庵・平岩仙桂と共に三儒と称されていた。その詩は格調高雅、寡欲にして志操高潔な人柄は五十川剛伯や昌興のひそかに敬慕するところであった。

江戸に来ると昌興と鳩巢の間が急速に近くなる。六月六日に鳩巢から「大学」章句の講義を受けたのを皮切りに、それ以降『論語』の学而・為政・八佾・里仁と各二編ごと講義を受け、九月二十九日には公冶長・雍也、十月七日には述而・泰伯と進んだ。次いで快晴で風もなく閑暇な九日、鳩巢を誘って兄の克明の旅亭を尋ねて「聞松風」題で賦詩詠歌した。

十月二十八日には昌興の松風亭に寄せる記一卷が鳩巢から贈られ、翌日にはまた『論語』郷党篇の講義を受けた。「松風亭記」に対して和歌三首を和し、それに序を加えて鳩巢に贈ったのは翌月一日である。江戸では昌興や鳩巢など若者達は、機会ある毎に学を深め詩賦の教養を深めた。小集にしても日記に記されたのは一部であろう。十日には昌興は小瀬助信や山本惟明を招いて閑談し、十二日にも鳩巢から先進篇の講義を受け、これ以降も更に講義は続く。新しい時代の創成期に参画する若者達の日々は充実していた。十二月晦日に昌興は歌う。

暮にけりをくりむかへし春穂の三十のとしもけふのみにして

4 貞享元年から三年まで

天和四年は二月に年号が貞享と改まる。江戸の藩邸で正月を迎えた鳩巢は、まだ喪中であって近侍を遠慮していた。四月六日に催された昌興の兄克明の旅亭での小集に、五十川剛伯・小瀬助信・種重等と共に始めて名前を載せる。二十日後の帰藩が決まっていたので、名残の小集だったであろう。

金沢に帰ると各々には各々の家庭があり、各々の日常があった。そして歳暮も押し迫った十二月、鳩巢は禄百五十石を賜り奥小將組に編された。既に儒臣となって奥小將組にあった小瀬助信や五十川剛伯と共に、綱紀の侍読として或いは藩士の子弟の教育に携わることになる。剛伯は、京の人であったが順庵の推薦により延宝三年五月藩の儒臣となり、歳禄三百石に学資を給されて江戸で朱舜水の業を受け、今年三十六歳になっていた。

年が明けて貞享二年三月二十六日、一年足らずの金沢での生活を終えて江戸へ発った。江戸に着く間もない五月二十八日、沢田宗堅が老病をもって致仕して京に帰った。その時の作にいう。

老病官居北海濱 春風拂面馬蹄塵
一朝解印歸郷呈 何處雲林應寄身

「訓読」老病官居す 北海の濱。春風に面を拂ひ馬蹄に塵す。一朝解印して郷に歸らんとして呈す。何處の雲林に應に身を寄すべし。

「解印」は印綬を解いて官を辞すること。宗堅は、今年六十二歳で濱・塵・身（上平十一真）

5 貞享三年・四年

貞享三年は江戸で正月を迎え、昌興は三十一歳、鳩巢は二十九歳と而立の年齢を迎えていた。そして綱吉による文治による治政はいよいよ浸透してきた。創業の代が終わり、守成の時代となると、「之を道びく徳を以てし之を齊ふるに禮を以てすれば、恥有りて且つ格る」という、徳治主義に基づく儒道が中心となる。その徳を修むべき操は『詩経』に充溢する純粹な情により醸成され、学問や詩作によって更に志を磨き、徳へと昇華される。「君子は、食飽くを求むるなく、居安きを求むるなし。事に敏にして言に慎み有道に就いて正す、学を好むと謂ふ可きのみ」とも孔子は説いたが、こうした生き様が君子者の在り方として理想とされた。昌興の志したものがこそ、この「有道に就いて正す」、つまり徳ある者について学び、己の生き様を君子の道に近づけることであり、そのための詩への志向であった。それはこれまで受けてきた、鳩巢による儒学の講義の実践でもある。一月五日は、風もなく快晴で、春の興趣の湧くのが抑えられなかった。そこで初めて賦詩を試み、その日の午後藩邸で会った鳩巢にその添削を依頼した。前年江戸に来てから閑暇の殆どを鳩巢の『論語』の講義に充てていたから、添削を依頼するのに最も適していたのである。鳩巢は容赦なく添削して、見事一箇の詩作へと昇華せしめてくれた。

山家立春 昌興
掃柴門獨迎春色 思閑舊年暮又来
黄鳥凌寒今將轉 破臆自見前嶺霞

柴門人少逐春閑 歎息年光去又来
黃鳥凌寒今欲囀 雪消山路自看梅

添削の第一は「色・来・霞」という欠韻を、「開・来・梅」の上平十灰韻と正すことから始まる。また承句の「閑・年」の平並びを、「息・光」と置き換えて二四不同の原則に訂し、「鳥・將」を「鳥・欲」に、「臆・嶺」は「消・看」に置き換えて二六対の原則に訂した。

昌興詩は、山家に居て春をただ待ち受ける趣のみで、詩は平板だった。これに対し鳩巢は、「山家に閑坐して、春となつて柴門を開けて春を逐え入れる」と、能動的でダイナミックな表現に変えた。それは二句目の「閑かに思ふ」を「歎息す」と置き換え、末句の「臆からは嶺々の霞が見える」を「雪が消えた山路を歩き、花を着け始めた梅を見る」と変えたことで、山中に足を運んで春を求める風流人へと変貌して見せたのである。遠慮無い辛辣な添削であるが、そこに示された指摘は、昌興の趣意を汲みつつ詩の精神を、生き様の高みにまで引き上げようとする、啓蒙あふれる熱意にも溢れていた。鳩巢は昌興に比して身分は甚だ劣っていたが、こと文事に関しては、初心者も熱く導く厳しくも慈愛に満ちた師であった。

この二人の親交を決定づけたのは、翌六日に記された鳩巢の「元旦」詩である。作全体は残らぬが、「日記」には「親闈 邇きに在るも人の遠きを奈せん。惆悵して安を問ふは早梅に依りてなり」と記されている（原漢文）。前日昌興は、梅花一枝をもらい楽しんでる所に、この詩を眼にして大層心を打たれたのである。江戸に滞在しているといつても、それは勤務であつて自由な時間はなく、自宅が

江戸にあつても許可なしに帰ることも出来ない。そのもどかしさを悲しみ恨んでいるが、それはこの早梅のせいなのだ、せめて一枝なり摘んで親に見せたいのという詩意は、鳩巢の心情を余すことなく伝えていた。「余、その情の深きに感じて、短札を件の一枝に付けて之を贈り、かつ蜂腰一首を相ひ加ふ」として

たちちめの安をとへと咲梅のにはひを風に送こそすれと詠んで、梅の一枝に添えて贈つた^{注20}。

昌興は四歳で父を、七歳で母を喪つている。そのためであろう、親に対する思慕の情が人一倍強く、忌日には必ず墓所である松月寺に赴き、参勤のために墓参が叶わぬ時でも江戸にあってその心を和歌に込めて詠い、または代参を兄弟に依頼するという風であつた。だからこの鳩巢の、想いの深さに胸打たれたのである。鳩巢はこの昌興の恩情に対して先掲昌興詩「山家立春」の韻をもつて応える。

一枝何處梅 寵贈草堂来 清香復寒色 春意共花開
「訓読」 一枝 何處の梅ぞ。寵贈されて草堂に来る。清香と復た寒色の心であつた。

又もこむ春をしらせよたちちめの千とせを契る梅の初花
たちちめの安きを誰か知らずべき君が心の花ならずして

贈られてきた梅は単なる花ではなかつた。己の親に対する情を誰よりも深く解する「心の花」であり、その親の千歳の壽を寿ぐ昌興の心であつた。

これ以降、昌興と鳩巢との関係はますます近くなり、昌興の詩への志向もますます進んだ。八日には鳩巢に五聯句の添削、九日には助信に三聯句、また平仄に不案内だったので鳩巢にその指導を仰い

だ。次は十五日に記された鳩巢の平仄を中心とした指導である。念のため添削部分のみ平仄を示した。

●○○●●●○○ ●○○●●●○○
已迎陽和想勿涯 曉來鐘響獨脚屐
遙眺東嶺求春色 霞氣朦朧日出遲

この添削は次のようである。なおこれにも平仄を示した。

○●●●●●●● ●●●●●●●●
迎↘逐 平ニテ。 想↘思 ヲモフノ時ハ平、 ヲモヒノ時ハ仄
●●●●●●●● ●●●●●●●●
勿↘莫 鐘響↘閑坐

起句の「迎」を「逐」に訂したのは、迎が平韻なので二四不同・二六対に反するからである。また「勿」は「無」を用いた所であるが、「無」は平韻なので「勿」を用いたのであるが、それを更に「莫」としたのは、「莫」は「漠」にも通ずるので意味の広がり求めたのであるろう。

添削のポイントは、承句の「鐘響」を「閑坐」に訂した所にある。「鐘響」のままだと「脚屐」とあいまって、曉鐘を聴きながら盃を口に運ぶという単なる絵柄で終わってしまう。しかし「閑坐」と置き換えると、「脚屐」という動作が「陽和」の春を迎えようとする心の働きになり、それが「遙眺」に通じて春の気配を探し求める動作に変わる。それは起句の「想莫涯」とする、待ち望んできた春への想いの強さの表出ともなった。わずかに二語の置き換えであったが、単なる春景色の情景描写が、春の訪れのかすかな兆候までもを探し出すように、心の動きの描写へと一変させたのである。

これ以降昌興の詩作活動はますます進む。十七日は鳩巢と、十八日は助信、十九日は鳩巢と小集を持ち、二十一日には鳩巢と共に坂井泰順を訪ねて梅花に賦し、夜には山本惟明も加えて小集を築んだ。更に二月五日には鳩巢に、七日は助信に添削を依頼し、十五日にはしばらく来訪のない鳩巢に、「ひとりのみ聞けば中々侘びしけれ昔ながらの軒の松風」と詠つて来訪を促した。三月二十六日には小瀬助信や鳩巢・矢田亮恵を自邸に招き「旅臆花」の題で賦詩し、桜井知親に招聘されて途中退席する鳩巢に、前庭の櫻花一枝を渡し、それに感謝する一絶を翌日鳩巢から受け取つた。

藤昌興雅丈賜前庭櫻花感其厚意乃賦詩且以和韻謝之
鳩巢

一枝滿手賞心香 艶々花房映艸堂
厚志無窮更堪報 雅懷終日詠吟長
思ふぞよ袖にふれこし櫻花香もなつかしき人のこころを
「訓読」 一枝手に満つ 賞心の香。艶々な花房 艸堂に映ず。厚志無窮、更に報ずるに堪へんや。雅懷終日 詠吟すること長し。

香・同・長（下平七陽）
そしてこの作を基に、昌興・知親も加えて三人で回章して贈答応酬を楽しんだ。「日記」ではこの前後、和歌も合わせて十六首に及ぶ^{（注21）}。

充実した日々は五月三日の帰藩まで続いたが、帰郷するとやはり各々は日常へと戻つた。ただこの年特記すべき事項が二つある。一つは六月二十八日、鳩巢が二十九歳にして束髪して儒臣となつたこと^{（注22）}、今一つは母と妹春を金澤の地に招き入れることが出来た

ことである。

先述もしたが、貞享元年には剛伯・助信と共に儒員の一人となっていた。順庵が四年前に去り、前年五月には藩の三儒と称された澤田宗堅・菖庵父子も、老病の故をもって辞して京に帰っていた。その穴を埋めるべく、束髪して儒臣に命ぜられたのである。「日記」にいう。佐々常憲・同有迪・室順祥、束髪の願い申し上げ候ところ、尤もと思し召され候。さ候はば束髪仕り、向後は侍役にこれ相い勤め、且つ儒の御用も相ひ達すべき旨、一昨日仰せ出され候よしなり。(原漢文)

雑塾での勉学も一段落し、儒臣として近侍し得る力が認められたのである。そしてこれを機に母と妹を金沢に招き寄せた。父元樸は既に三年前に没している。二年前には禄百五十石も得た。一家を支えて団欒の家庭生活を味わうには十分だったのである。後年、元禄三年の秋、長町に中古住宅を購入した時の「鳩巢記」にいう。

ここは幸いに市場から近く、朝晩の食材を手軽に得て親に美味しいご馳走を食してもらえし、来客があつたとしても、酒肉を調達してご馳走することも出来る。これはまた、小人たる私にとつて利点といえるし、この利点さが、生活を愛おしみながら私の拙を補つてなお余りがあるのです。(原漢文)

こうした小市民的幸福こそが、幼年から父母の下を離れて、小坊主として綱紀に仕えながら学問に身を投じてきた鳩巢にとつて、味わつてみなかった喜びであつたに相違ない。

この母を伴つての加賀行きは、順庵父子によつて暖かく送り出され、その厚意に謝する作が賦されている(注23)。

次韻木順信送予奉母赴賀府 鳩巢

自及師門後 從遊經幾年 雅論資講習 項質就磨研
水比交情淡 花將藻思鮮 孔庭聞禮趣 孟母擇仁遷
文物東都地 関山北海天 得詩知秀逸 叙別覺留連
深愧木瓜報 難投君子前 時秋鴻雁足 援筆意悽然
〔訓読〕師門に及びし自り後、從遊して幾年をか経し。雅論は講習を資け。項質は磨研に就く。水は交情に比して淡く。花は藻思を將て鮮なり。孔庭に禮を聞きて趣り。孟母は仁を擇びて遷る。文物東都の地。関山北海の天。詩を得て秀逸を知り。別を叙して留連を覺ゆ。深く愧づ。木瓜の報。投じ難し。君子の前。時に秋。鴻雁の足。筆を援りて悽然たり。

年・研・鮮・遷・天・連・前・然(下平一先)

〔雅論講習〕は順庵から受けた学業。「木瓜報」とは、『詩経』衛風「木瓜」の一節を引いたもの。「我に投ずるに木瓜を以てす。之に報ずるに瓊瑤を以てす。匪れ報いたり、永く以て好を為さん」と。女が私に木瓜の実(小瓜)を投げてくれたから、私は美しい玉で応えよう。そして未永く仲良く暮らそうという求愛の歌である。鳩巢はこれを、私は師から瓊瑤という寶石を得ながら、お返しをすといつても木瓜でするしか能力がない。だから投ずるに投じ難いのだと、慚愧をこめて詠つたのである。

家族を金沢に迎えた秋頃の作が同じく「文集」巻二にある。

詠庭前菊花寫思四首 鳩巢

戸外新開菊一叢 金英明媚欲凌空
衡門深鎖無人賞 獨送秋光霜露中

〔訓読〕戸外新たに開く、菊一叢。金英明媚、空を凌がんとす。衡門深く鎖して人の賞するなく。獨り秋光を送る。霜露の中。

叢・空・中(上平一東)

どんなにみずばらしい家でも、菊は晩秋の寒さの中金色の花を空一杯に輝かせる。菊はこの嚴霜の中、花々の中で最後に花を咲かせ、君子然として気高い秋の輝きを人々に贈り届けているのだ、と。

家族を金沢に迎えたといつても、決して城下の中心でなく、どちらかといえば城から遠い、町はずれであつたろう。それでも家族があれば城中の生活にも勝り、すこし目をやれば秋霜の中に咲く菊や、雪の中に香を放つ梅の花もあるのだと、鳩巢は胸を張るのである。

こうして家族を金沢に迎えて貞享四年となつたが、昌興も鳩巢も、ほぼ日常の煩わしさを忙殺されていたのだろうか、小集を催した気配は全くない。三月八日の記に、五十川満之・助信・鳩巢・佐々正業を招請して閑談した旨あるのが唯一で、五月二十二日には、助信や鳩巢に御能の始終を記録すべき旨が申し渡されるというような、儒臣の仕事とは言い難い雑務が記されるのみである。やがて九月参勤のため江戸に出向き、貞享五年となり、九月に元禄と改められた。(以下次号)

注1. 『昌興日記』(以下「日記」と略称)元禄三年九月二十六日条に「予被召出既十有九年朝暮近侍如此之段」とある。この年の十九年前は寛文十一年となる。

注2. 『松雲公遺編類纂』所収。

- 注3. 『錦里先生文集』巻十一・「松雲公遺編類纂」所収「雑詩」。
- 注4. 辺土名朝邦『叢書日本の思想家』十一集「中村楊齋・室鳩巢」。
- 注5. 『可観小説』巻八。
- 注6. 『鳩巢先生文集』(以下「文集」と略称)補遺卷十所収。
- 注7. 『文集』巻二。
- 注8. 辺土名氏前掲書。
- 注9. 『金沢市史』第一章第二節「藩主の日常」による。
- 注10. 石川県図書館協会刊「景周先生小著集」所収。「文集」上編卷十三等。
- 注11. 『文集』巻二「元日十首」その一。
- 注12. 『日記』天和二年八月八日条に「木下順庵、去二十八日御目見相済候」とある。
- 注13. 『文集』補遺卷十一。
- 注14. 『日記』十二月二十二日条。
- 注15. 『日記』一月八日条に「丹直清、父の喪にこもりて居侍りけるまま春雨の清勝をとぶらふ」とある。
- 注16. 『石川県史』第三章第二節「漢学上」・「加能讀史年表」等。
- 注17. 『日記』五月二十八日条。
- 注18. 以上『論語』学而篇。
- 注19. 『日記』貞享三年一月五日条。
- 注20. 以上『日記』貞享三年一月六日条。
- 注21. 『日記』三月二十六・二十八日条。
- 注22. 『日記』貞享三年六月二十八日条、「加賀藩資料」等。
- 注23. 『文集』巻二。